

昭和電工株式会社 2018年通期 決算説明会 Q&A要旨

日時：2019年2月15日（金）10:00～11:30

説明者：代表取締役社長 CEO 森川 宏平

執行役員 CFO 竹内 元浩

*内容は、開催日時点の情報に基づいております。

【全社】

Q 2019年前提の為替感応度は。

A 為替感応度は、円ドルは1円につき10億円であり、その6～7割が黒鉛電極事業。ユーロ円は同10億円のほぼ全てが黒鉛電極事業となる。

Q 配当額の考え方については。また、2019年130円予想の上期50円・下期80円についての考え方は。

A 安定した配当の維持・継続が当社の基本的な考え方である。昨年12月に自社株買いを実施したが、自社株買いは2019年も積極的に検討していく。配当額の上下期の配分について、昨年は中間配当を20円させていただいたが、今年は少し均等性を考慮した。

Q 特別損失：2019年予想で織り込んでいる特損益ネット200億円の内容は。

A 一部事業での事業構造改革に加え、改善投資を積極的に行うことで除却損が増えるとしている。例えば黒鉛電極・基礎化学製品事業等に改善投資を実施する予定。

【石油化学セグメント】

Q 2019年の営業利益は大型定修がなくなるのに減益予想となっているがなぜか。

A 大型定修がなくなることによる60億円の増益要因はあるが、原料ナフサ価格の下落による受払差、エチレン等のスプレッドの圧縮を織り込んでいる。需要は堅調で通期でフル稼働を想定。

【化学品セグメント】

（電子材料用高純度ガス）

Q 「伸ばす」ポートフォリオで、高純度ガスの伸び方については。

A 高純度ガスの使用量は高層化・微細化に伴い増え、ウエハー枚数以上にプロセスガスの使用量が増えたと見ている。伸び率については、2019年上期は踊り場になると見込むが、新中計期間の平均では+15%/年程度の伸びが維持できると見ている。

【エレクトロニクスセグメント】

（パワー半導体 SiC）

Q 「伸ばす」ポートフォリオで、SiC事業は規模を2021年には3倍にすることだが。

A SiC事業は2025年に自動車用途を含めない世界の市場規模で1,500億円程度の大きさになると見ている。自動車向け市場が将来どの程度の大きさになるかはまだ分からないが、世界シェア3割を狙っていく。足元では売上高は年2倍のペースで増加している。

【無機セグメント】

（黒鉛電極）

Q 黒鉛電極とNCの価格について、2019年の織り込みは。

A 2019年の黒鉛電極の平均価格は2017年比で5倍、NCは同6倍を織り込んでいる。黒鉛電極の主要顧客との契約期間は半年間だが、欧米は1～6月、アジアは4～9月契約と地域によってズレがある。

Q 2018年4Qは同3Q比減益となったがその要因は。

A 黒鉛電極の販売価格は、比率の高い欧米が7月からの6カ月契約なので、日本・アジア向け価格が4Qに上昇したものの平均価格に大きな変化はない。4Qに出荷数量の期ズレが生じたことと実際のNC在庫払出し単価の上昇もあり減益となった。電極は半期契約が多いので、上期・下期の単位で業績を評価していただきたい。

Q 2019年の出荷量は2018年比どうなるか。

A 1万t近い数量増を見込むが、公称の生産能力25万tには届かない。増加要因は米国子会社の増強効果、減少要因は積極的な改善投資によりフル稼働が出来ないラインが一時的に生じること。

Q 2018対2019予想で、無機セグメントの営業利益の増加幅が小さい理由は。

A 黒鉛電極のスプレッドは拡大するが、円高による為替の影響とNCの在庫払出し単価上昇を織り込んだ。コストダウンについては、引き続き統合効果の顕現を着実に進めていく。

Q 4Qのアジア価格はどうなったか。

A 4Qの日本・韓国・アジア向けの販売価格は、2017年比5倍程度まで上昇した。

以上

*本資料の将来見通し等に関する記述は、今後以下のような様々な要因により実際の業績と大きく異なる結果となる可能性があります。

- ・経済情勢、ナフサ等原材料価格、黒鉛電極製品等の需要動向および市況、為替レート
- ・法改正や訴訟等のリスクなどが含まれますが、これらに限定されるものではありません。

また、為替レートや国産ナフサ価格など予想の前提につきましては、2019年2月14日発表の弊社決算短信をご参照ください。